

工芸

応募点数	50点	招待作品	21点
入賞点数	6点	展示点数	59点
入選点数	32点	◎は移動展出品作品	

(総 評) 本年度、工芸部門には陶芸、染織、金工、木竹工、人形、ガラスに昨年より3点増の50点の一般応募がありました。残念ながら審査委員一同「これは」という作品がなかったことから知事賞は見送りとなり、受賞6点、入選32点が選ばれました。昨年来のコロナ禍で、私たちの日常はさまざまに影響を受け、なんとなく心がふさぐ、やる気がおきなくなる中で、いつものように作品を作り、本展に出品された皆様に敬意を表します。一心に手を動かし、集中する時間が心の慰めや日々の活力になったであろうと想像します。コロナ禍は、改めて物づくりに携わることができるありがたさを感じる機会にもなったのではないのでしょうか。

島根県展の審査に初めて参加させていただいて、釉薬物を主とする陶芸や緋等の染織、人形の充実など、岡山県とは異なる作品の有り様に風土が育む地域文化の違いが感じられ、新鮮でした。各々が自身の目指すところに向かって努力されている様子が見えましたが、その先にもう一步飛躍できないのではないかと感じました。招待作品を含めても出品数が少ないことは、ともに切磋琢磨できる相手が少ないこと、相談しアドバイスを求める機会が少ないことにもつながっているのではないのでしょうか。その中で指導的立場にいる審査委員諸氏がジャンルを超え、下支えされている様子が印象的でした。労を惜しまぬ彼らを核に島根県の工芸の輪がもっと広がっていけばなあと思います。

いくつかの作品は工芸部門で審査をするのが適当なのか、書や彫刻部門ではなかろうか、という作品が見受けられ、審査される作者にとっても良いのか悪いのか、気になりました。公募展に出品し、評価を得ることは独善的にならず、自身の制作を客観的に顧みるよい機会ですし、衆目に晒されることを意識するならば、細心の注意を払い、自身の作品を仕上げる、そのツメを大事にしていくことが成長の鍵ではないかと思えます。皆様にはより一層のご精進を願います。

(文責 福富 幸／岡山県立美術館学芸課長)

金 賞 ③

まんだらもんそめつけきんさいはないれ
曼茶羅紋染付金彩花入

あらお尾く美 (大田市)

作者は京都で焼き物を学んだ後、大田市の地元で採れる粘土や釉薬を用い、制作されているとのこと。一昨年、昨年と続く受賞です。赤土をロクロ挽きし、楕円形の裾をくの字に絞ったシャープな器形、素地を部分的に残すようにマスキングして白化粧をかけて焼いた後、椿をモチーフとした花文を染付で描き、焼成後さらに金彩を施しています。作者こだわりの染付で花卉のひとつひとつにも細やかな文様が施されるなど、形、釉かけ、装飾ともに大変工夫されています。民藝の影響が強い土地柄ですが、今後さらに釉かけや絵付の精度を上げていけば独自の染付陶器になるのではと期待します。
(文責 福富 幸/岡山県立美術館学芸課長)

銀 賞 ③

しそわしぼり いなせ
紙塑和紙貼「鯨背」

おむらまちこ (出雲市)

人の体の仕組や、筋肉の動きをよく見られていて、動きのある作品だと思います。鯨背というタイトルのごとく、容姿も粋で、心意気を感じます。いろいろな和紙を何枚も貼り合わせて色合いを出し、家紋も切りはってあります。目のとどかない所にも、心づかいが感じられます。作者の人柄がわかる様な、とても丁寧に作られた人形だと思います。益々のご発展を期待致します。
(文責 吾郷江美子)

銀 賞 ③

もろしふつづれおりおび ちゅん
諸紙布綴織帯地「瑿」

やまうちゆう (川本町)

作者は春の自然の息吹を「瑿(ちゅん)」という題名に託している。自らの手で石州和紙を、巾2.5mmのテープ状に細く切り、それに縀りを加えて経糸・緯糸として独特の風合いを持つ紙布の帯を織り上げている。

ポイントに春の息吹のイメージを綴れ織りにして表現し、おだやかな紙布の面の中にリズムを加えようと挑戦している。素材を大切に素材に寄り添いながら、さらに新たな表現を生み出そうとしている作者の今後の活躍が期待される。

(文責 松浦 弘美)

銅 賞 ③

ぬかじろゆうかたくち
糠白釉片口

おのともひこ
尾野友彦 (松江市)

片口は液体を注ぐ器として古くよりみられ、木製の品もある。日用の道具であり使い勝手がよく、見飽きない形態が求められ、まさに民芸の筆頭にあげられる器といえる。

本作は、高さが低い大振りの片口で糠白釉が全体にかかり、小形の注ぎ口がアクセントとなる。釉薬にもみがらを使い乳濁色に発色した糠白釉の調子も美しく、民芸窯の伝統を継ぐ熟練の技が見て取れる。
(文責 藤間 寛)

銅賞 ②

紙塑和紙貼「爽風」

松本輪加子 (松江市)

ノースリーブのワンピースにサンダル、さわやかな風がスカートを翻し、ほおをなでる——夏の一コマでしょうか。肩の力がぬけた自然な姿態、女性の穏やかな表情に見る者の心もほっこりさせられます。紙粘土で成形し、磨いた後に胡粉を塗り、和紙を貼って仕上げていきます。一際、目を惹く衣裳のピンクから紫、濃青へ変わる微妙なグラデーションは慎重に和紙を貼り合わせ、余計なものを取り除き、表現されたもの。丁寧な仕事ぶりに好感が持てます。

(文責 福富 幸 / 岡山県立美術館学芸課長)

銅賞 ③

寄せては返す

長谷川三芳 (松江市)

子供の頃から親しんでいた海の波打ち際、大きな空間の世界を表そうと、努力された作品。ずっと見つめ、題は異なっても、去年の作品よりスケールが大きくなったのではと思ふ。水の世界、石や砂も河口付近と別の所とでは違う風景、ガラス玉を作る事から始まる努力ですが、次は泡の世界も追求してみても…。色々楽しませていただき顔が笑いました。

(文責 福郷 徹)

入選

題名	氏名	備考
南無妙法蓮華經	金森惣司 (松江市)	
漆黒釉壺	古川幸希 (出雲市)	新人賞
曜変茶碗	郡司位秀 (松江市)	
炭斗	今川逸郎 (松江市)	新人賞
飴釉象嵌線文水指	大坂幹裕 (雲南市)	
青菽釉花器	大坂幹裕 (雲南市)	
禮記 學記第十八より	高橋成和 (松江市)	
大井戸茶碗	江村進 (松江市)	
トレジャーハント	中尾和美 (出雲市)	
茶碗	内部隆 (松江市)	
茶碗	森山晴夫 (出雲市)	
筒描風景文皿	板倉清之 (出雲市)	
型絵染タペストリー 樹下にて	神田立 (松江市)	
六角水指	越野良一 (松江市)	
深海青鉢	石原奏司郎 (松江市)	
遠いおもいで	上野幸美 (出雲市)	
面取黒釉花器	山田正彦 (松江市)	
来待石粉ランプシェード	松下純子 (出雲市)	
来待石粉5色カップ	松下純子 (出雲市)	
花入 (鬼滅の刃)	小原敬貴 (松江市)	

題名	氏名	備考
土偶	岸 崇 将 (松江市)	
秋麗	福 間 達 也 (出雲市)	工芸連盟賞
八畝面耳付花入	藤 井 弘 一 (松江市)	
長方角皿	藤 井 淑 美 (松江市)	
蓋付菓子器	藤 井 淑 美 (松江市)	
彩釉壺	小 糠 弘 昭 (松江市)	
華やぎのとき	鳥 谷 幸 代 (松江市)	
㊦ 曼荼羅紋染付金彩花器	荒 尾 久 美 (大田市)	
㊦ 布目灰釉足付大皿	螺 山 勝 實 (浜田市)	
㊦ 茶器	山 崎 三 仁 (大田市)	
㊦ 荒土茶盃嘉久志	嘉 戸 昇 柏 (江津市)	工芸連盟賞
㊦ 共に生きる	田 中 俊 晧 (江津市)	工芸連盟賞

招 待

題名	氏名	備考
㊦ 出雲焼茶碗	長岡住右衛門空郷 (松江市)	
㊦ 炎彩水指	柳 楽 勝 重 (出雲市)	
㊦ 沈泥彩陶筥	犬 山 卓 也 (出雲市)	
㊦ 広瀬緋着物「新緑の頃」	永 田 佳 子 (安来市)	
㊦ 呉須蓋付き壺	石 飛 勝 久 (雲南市)	
㊦ 土の紋	福 郷 徹 (益田市)	
布張月光塗盆「山陰の月」	石 村 稔 (松江市)	
㊦ 縹縹幾何文花入	内 田 和 秀 (松江市)	
萩ニ蝶乾漆鉢	漆 原 彬 之 (安来市)	
㊦ 麻地型絵染帯	黒 川 裕 子 (江津市)	
杉空造格子縁組二曲屏風	藤 原 正 (出雲市)	
枳造拭漆盛器	村 山 創 達 (松江市)	
ほら紹織菱紹生絹着物「朝涼の花」	松 浦 弘 美 (松江市)	
杉箱	渡 部 良 和 (雲南市)	
㊦ 櫛造拭漆蓋物	濱 田 幸 介 (松江市)	
㊦ 鉄釉窯変花器	荒 尾 浩 之 (大田市)	
㊦ 木綿手紡絵緋「走り雨」	木 下 恵理香 (出雲市)	
神代杉茶箱	深 田 学 (雲南市)	
紙塑和紙貼「若き棋士」	吾 郷 江美子 (出雲市)	
省胎七宝鉢「leaf」	松 本 三千子 (松江市)	
出雲焼耳付水指	【遺作】長岡 空権 (松江市)	